

P-19 子宮肉腫診断におけるMRIの役割

杏林大

小菅浩章、飯塚義浩、吉岡増夫、高橋康一、
山内 格、武者晃永、葉梨秀樹、酒井 謙、
佐藤 学、吉村泰典、中村幸雄

〔目的〕子宮肉腫は術前に診断がつかず、開腹時や病理検査ではじめて肉腫と判明する場合があります。臨床上重大な事態を引き起こしうる。このため本研究では、肉腫のMRI所見を解析し、その特性を明らかにするとともに、他の子宮体部腫瘍との術前の鑑別がどこまで可能なのかの検討した。

〔方法〕当科で施行したMRI 368例全例を検索して、子宮体部に腫瘍性病変が指摘され、手術・病理学的確認を行いえた筋腫76例、体癌57例、境界病変・低悪性度を含む肉腫8例の計141例を対象とした。子宮内腔での発育を主体とした腫瘍ではintensityが均一か否か、筋層由来の腫瘍ではT2像で、I型:low intensity (LI)均一、II型:LIな腫瘍内にhigh intensity (HI)な点状陰影散在、III型:LIな部分とHIな部分が混在、IV型:大部分がHIに分けて評価、さらに腫瘍内血管の有無についても検討した。

〔成績〕体癌57例では全例腫瘍がHI均一だったのに対し、内膜間質肉腫(ESS)と悪性ミューラー管混合腫瘍(MMMT)各1例では不均一な腫瘍構造が指摘された。筋腫76例、境界・低悪性度3例、平滑筋肉腫(LMS)3例の画像パターンは各々、I型49%, 0%, 0%, II型32%, 0%, 0%, III型8%, 33%, 100%, IV型12%, 67%, 0%と悪性度により異なったパターン分布を示した。腫瘍内血管はESS 1例、LMS 3例の肉腫5例中4例と高率に認められ、一方低悪性度LMS、体癌を含め、他の腫瘍ではすべて所見陰性であった。

〔結論〕ESS, MMMTでは内部構造を認め、腫瘍内均一な体癌とは異なる所見を呈した。境界病変、低悪性度LMSは多くIV型を呈し、変性筋腫との鑑別が困難であったが、悪性度が高いものは不整な内部構造より鑑別可能で、特に腫瘍内血管の存在が診断上重要であることが判明した。

P-20 dynamic MRIは子宮筋腫から子宮肉腫を鑑別できるか—conventional MRIとの有用性の比較

姫路赤十字病院、三菱水島病院*、岡山協立病院**、
岡山大放射線科***

赤松信雄、川田昭徳、新居田一尚、小高晃嗣、長尾昌二、吉原英介*、平井 武**、上者郁夫***

〔目的〕MRI、特に造影剤静注直後の造影効果を描写するdynamic MRIと造影剤静注5～10分後に撮像するT1強調像(造影MRI)による子宮筋腫と子宮肉腫(広義)との鑑別能を明らかにする。〔方法〕子宮体に発生した平滑筋肉腫5例、癌肉腫1例、中胚葉性混合腫瘍3例の子宮体肉腫9例と子宮筋腫23例26筋腫核に対して0.5ないしは1.5Tの超電導型装置によりMR画像を撮像した(dynamic MRIと造影MRIは32腫瘍で施行)。〔成績〕dynamic MRIで早期から末期まで強く造影され、造影MRIでも高信号であった腫瘍は平滑筋肉腫3/3(100%)と筋腫核4(15%)であった。dynamic MRIで中期以降強く造影され、造影MRIでは筋層よりも高信号であった腫瘍は癌肉腫1(100%)のみであった。dynamic MRIで早期のみが筋層よりも高信号であった筋腫核が2(8%)あったが、中胚葉性混合腫瘍2(100%)と筋腫核20(77%)ではdynamic及び造影MRIでの造影効果は僅かで、筋層より低信号であった。造影MRIのみで筋層よりも強く造影された腫瘍はなかった。一方、T2強調像では肉腫9(100%)で高信号域が観察されたが、筋腫核では7(27%)のみで、しかも5筋腫核は偽嚢胞を示した。T1強調像では肉腫9(100%)と筋腫2(85%)で筋層と等信号が主体であった。

〔結論〕dynamic MRIの画像パターンは子宮肉腫と子宮筋腫で混在していた。造影効果が大きい腫瘍では平滑筋肉腫・癌肉腫の確率が高かった。一方、中胚葉性混合腫瘍では多くの筋腫同様に造影効果は乏しかった。T2強調像では全ての肉腫が高信号であり、この所見を合わせてMR画像を読影することで、子宮肉腫の画像診断の可能性が示唆された。